

教務だより

2011年4月号
茗溪塾

茗溪塾教務部 03-3659-8638

4月の空に...。(目的を持って始める)

茗溪塾塾長 宇野 雅春

春の暖かい風が、青空と一緒に訪れたような爽やかな印象が時々あります。桜の花も咲き、いつもの春と寸分たがわぬ日常を感じています。でも、今一つ心が弾まないのは、戦後最大と言われる東日本大震災でのおびただしい死者の数と、それに伴って世界を震撼させている福島原発事故のせいかもしれません。未だに解決の糸口が見えないなかで、何をどう考えていいのか？何か大きな転換点を迎えているような気がしてなりません。

日々報道される惨状に、この先の日本の行く末に未知の不安を覚えます。でも、必死で復興に向かおうとしている被災地の様子を見ると勇気づけられることもたくさんあります。季節は4月。新しい出発の時です。多くの人が新しい生活を始めます。

全ての生徒たちは一様に新学年に進級し、あの冬の厳しい「受験」を闘いぬいた受験生たちは、新しい学校生活に突入します。期待と不安で心が揺れるときです。

「これからどこに行けばいいのか？」という問いかけは、まだ自分の中に「目的」がはっきりしていないことから起こります。実は、重要なことなのですが、軽く考えている生徒が多いような気がします。つまり「目的」がなければ先にすすむ事はできないということに気が付いていないのではないかと。「目的」とは、地図のようなものです。レシピがなければ、料理は出来ず、設計図がなければ、建物ができないように、地図がなければただ行き当たりばったりになんか求めてさまようことになります。

今の日本の混乱している状況では、なおさらその「地図」が必要な気がします。

「目的を持って始める」とは、人生の行き先をはっきりとしたイメージで描くことです。自分の大切なことを決めて、目標を定めるということです。10代の生徒たちは、全員岐路に立っているといえます。人生の岐路とは人生の分かれ道のことです。やけくそになって非行に走ったり、人に誘われるままに楽な方に流されていくこともありえます。そして、それは一生に大きな影響を与えます。いくつもの分かれ道が行く手に待ち構えています。

今、その中でも塾の生徒達が一番考えるべきなのは「学校をどうするか？」ということです。学校は将来を大きく左右するものです。10代であれば望むことの全てが「可能性」を持っています。でも、そのほとんどが、学校や学習に関係しています。

自分の持っている力を過小評価しないためにも、自分で見極めることが必要です。自分自身で未来像をつくらないと、誰かに作られてしまうことになります。大切なのは、どんな人になりたいか、何になりたいか、自分の未来像を自分で作るということです。

今年の塾生ノートは、この「目的を持って始める」を意識して作られています。

「未来計画年表」「一年後の自分宣言」そして「私のミッションステートメント」。全てが「目的を持って始める。」ためのツールです。自分が何に勇気づけられるのか、何をするのが好きか、誰を尊敬しているのか、自分の人生をどの方向に向けたいのかがこれらを考える中で整理されるはずで

4月は自分の望む方向や目標を明確に思い描く時期になります。選抜高校野球での東北高校のことが頭をよぎります。震災直後、惨状を前に東北高校のメンバーは「甲子園に行っていないのかわからない」と言っていました。練習もほとんど出来ない中で、避難所の人々の激励を受け、大阪にいった彼らは、やっと出来た練習を積みながら「今は、やれることをやる」という気持ちに変わっていきました。少しでも被災地の人々の元気になれば...、という思いです。そして、彼らの全力疾走は大きな感動と元気を被災者たちにも与えました。やり終えた後も部員達は被災地の復興を手伝っています。「夏に向けて一歩ずつでも進む」。この災害の中でも、彼らを動かしていくのは、「被災地の復興」と「夏の甲子園出場」という大きな「目的」です。